

不在の過去
—夏目漱石『門』における時間と空間の構造

張 希毅

The Absent Past
—The Construction of Time and Space of *The Gate* by Natsume Souseki

ZHANG XIYI

Abstract

Natsume Soseki was well-known as a novelist who was good at presenting normal Japanese people's life in a realistic way. What made Natsume Soseki's novels so attractive was not only his narrative technique, but also his use of accumulated knowledge to create a new realm for narrative. In his mid-to-late novels, the adaption of the traditions not only became a basis point for him to criticize modern Japan, but also can be understood as his attempt to broaden the boundaries of modern realistic narrative. In his literary space, there are memories of the lost pre-modern space of meaning and his hope for the Japanese nation in the coming future. The resonance of these two sentiments brought various interpretation to his novels.

This essay intends to verify the relationship between the symbolic composition and the unconscious realm through Natsume Soseki's novel *The Gate*, in order to analyze Soseki's historical awareness on Japan's separation between modern and pre-modern times. Furthermore, through the analyses of the spatial construction of the bodies of the characters as a metaphor of the whole country, this essay proposes to investigate Soseki's awareness of the underlying colonialism in the texts. What is more, Soseki's command of Zen reflects his vision of a civilized country which reconciles the contradictions of the past and the present at a symbolic level.



目次

序章 時間の閉域

1. 重層化された「外地」
2. 情念という「病」
3. 「門」を潜ること

終章 未来への志向

参考文献リスト

キーワード

序章 時間の閉域

『門』は漱石の諸作品のなかで数少ない、家庭生活を舞台とした小説である。明治42年から43年にかけて展開されるこの小説では、季節の移り変わりや日々の変化が細やかに描き出され、時間感覚が意識される。宗助は漱石の小説を代表する、一切の社会的ステータスから遊離した「高等遊民」たちとは違い、自我の発露を自らに禁ずる、近代とは相入れない気質にとらわれながらも、巨大な機械を構成する近代国家の歯車である「官吏」という公的な身分を持っている。社会と絶縁するところに自足している『こころ』の「先生」とは対照的に、生計に悩み、官吏として働いている宗助は、より鮮明に当時の一般的な日本人の様相を浮き彫りにしている。このように、公的なものと私生活とが重層的に描き出される点は『門』の大きな特徴の一つである。その上、食事の場で伊藤博文の暗殺事件のエピソードが突然持ち出されることから見れば、宗助の現在である日常生活の裏には、常に作者である漱石の時代意識が働いている。そして、宗助の現在の背後に、彼が過去からの復讐としてとらえる、運命の惨憺たる影のような、現在とは異なる時間が常に感じられている。

下級官吏としての宗介の生活が「週」という近代的な時間の円環に回収されるように、夫婦の目は常に現在を見据えている。彼らは、現在性と日常性に基づく倫理によって、自分のあり方を半ば強制的に固定しよ

うとしている。現在に対する半ば強迫観念的な夫妻の執着は、二人のかつての「罪」に由来する。二人が現在に執着し、過去を語らないのは、安井に対する裏切りという過去を否認するためである。また、三度に渡り子供を喪った経験によって、未来に対する希望が封じられたからだと言えるだろう。

しかし、自我の発露をみずから禁じ、儉約な生活に甘んじつつ、神経衰弱に悩まされる現在とは違い、かつての宗助は「相当の資産のある東京ものの子弟」として、倦むことなく新しさを追求していた。「暖かな若い血を抱いた」宗助の目には、未来は「虹の様に美しく」(「十四」)¹映じていた。柴田勝二は、「労働を自我喪失の場としてしか眺めず、週一回の休日に縋るように日々を送っている宗助は、いわば西洋から移入された制度によって去勢された人間」の典型であると指摘している²。もっとも、西洋的な制度によって去勢される以前に、大学時代の友人である安井から同棲者の御米を奪ったことにより、宗助は自らの手によって自我を破壊させ、その去勢を果たしたのではないだろうか。父の関係で人脈を築き、明治日本を特徴づける「立身出世」という功利主義の原理に順応していた宗助は、やがて「去勢」され、「神経衰弱」に苦しむようになる。講演「現代日本の開化」で漱石は、西洋人が百年をかけて成し遂げたものを「その半ばに足らぬ歳月」で完成しようとしたために、「神経衰弱」に陥った当時の日本人を批判している。宗助の身に起こった変化はまさに急激な西洋化の反動によって能動性を封じられ、去勢されたこれらの日本人の姿と重ねている。

佐伯順子は、江戸時代の「色」と「好色」が近代文学の一つの底流となり、純粹に精神的な西欧的「愛」への希求と混在し、明治期の文学の一つの大きな特徴となったと述べている³。佐伯が指摘するように、宗助と御米との夫婦関係に見出される一種の西洋的な愛の理想の形は、明治民法のもとで成立した「家」制度によって保証されている。以上から見れば、宗助と御米との夫婦関係は極めて「近代」的な産物と言えよう。それに対し、安井は御米と二人で人目を避けるよ

うに京都へ赴き、親友である宗助に御米が自分の妹であるという嘘をついた。二人の関係は世間に祝福されない駆け落ちという「結婚外の男女関係に美的価値」を見出した⁴、前近代的な「色」と「好色」の空間の中で把握すべきに違いない。

近代を象徴する宗助に同居人を奪われたことで、過去を象徴する安井は最終的に日本を離れ、満洲に渡ることになった。換言すれば、日本という中心に相對する周縁の地である外地に葬られたと言えよう。重大な意味を持つこの不義の事件に、近代日本の起源の寓意性が託されていると考えられる。実際、禅などの東洋的伝統を記号として含意する安井を追放することから展開される宗助の物語には、西洋的近代の特質が見事に織り込まれている。チャールズ・テイラーは、西洋の近代へ移行する道程を「大いなる脱埋め込み化」という概念をもって説明している。「大いなる脱埋め込み化」とは、近代以前では自然法と社会の階層的秩序にその原理が置かれているのに対し、近代社会では各々の個人が社会と契約を結ぶ形で、社会全体を立ち上げる代わりに、社会が個人の有する自由と権利を保証するという認識の変革のことである⁵。宗助は御米を奪う対価として、個人としての能動性を一部喪失し、最終的に下級官吏という身分で近代社会と契約することで、社会生活に必要な身分と金銭、そして週一日の日曜日には自由気ままに道楽に耽ける自由を得たのである。姦通が刑法で罪とされる当時に、宗助が容易に御米を奪えたのは、彼女と安井の関係は伝統的な「色」の空間に属していたためであろう。それに対し、宗助と御米との関係は「法」という近代の地平で堅実な保証を得ている。

野上摩利子は「文芸にも哲学にも縁のない」宗助夫婦とは違い、「勉強」家とされる安井が、宗教や文芸と哲学、中でも主に能や浄瑠璃、禅などに関心を持つことが窺われると指摘した⁶。それに加え、宗助と安井にとっての「愛」の意味合いの違いから察すれば、宗助が「近代」という時間的位相を寓意するように造形されているとすれば、安井は明らかに過去の時間の位相の寓意性を持っている。もっとも、作品内の時間

を辿れば、「禅」に縁のある安井を追放する宗助が、やがて「禅」に助けを求めるテキストのプロットの進行自体が、一週間の円環を循環する宗助の単調の日常と照合するように、作品の時間を一つ大きな円に収束するものである。本論では、上述の作品における時間の構造への分析に基づき、安井が赴いた満洲という外地を手がかりに、『門』における空間の造形を分析し、最後に、「現代日本の開化」の中で指摘された近代日本の「外発の開化」という歴史的矛盾を、テキストの象徴の次元で解決する構図を提示する。

1. 重層化された「外地」

テキストの中で、宗助が帝国の周縁から感じる不安は、「安井」という、彼が意図的に意識の周縁に追いやり、忘却しようとする対象によって引き起こされるものである。「安井」が帝国の周縁に渡ったことによって、「満洲」という空虚な地は宗助の現在を攪乱してやまない過去の地平として立ち上がっている。直接的に描写されることがなく、ただそこから発信される消息が主人公夫婦の意識と行動を攪乱しつつある。意図的に忘却され、抑圧された「外地」は、テキストにおける「識末もしくは識閥下」の無意識の領域だと言えよう。

そこで、外地という無意識の地平とは対照的に、宗助のいる内地—日本は識閥上の部分を意味すると思われる。『文学論』における (F+f)⁷ の図式に従えば、このアレゴリー的に造形される無意識の空間、つまり満洲からの消息は、識閥の周縁から浮上してきた情緒的な f として、常に登場人文の「生」を攪乱しつつあり、テキストにおける意識の焦点の変動を推し進めている。例えば、満洲に渡った冒険者の弟の帰還は直ちに、子供を多く抱える坂井に金銭的な悩みをもたらすことになる。そして、「安井」という大陸からの幽霊を鎮めるために、宗助が参禅という唐突な行為に出ることなどが挙げられる。

しかし、『門』の中での中心対周縁の構造は、内地—外地という両極に収束されることなく、むしろ同心

円のような形態をもって重層的に展開されていく。その最も典型的な例は「崖の上の西洋人」として描かれた坂井と崖の下で貧乏な暮らしに甘受している宗助との対照である。日本の伝統的な骨董品を大量に収集し、洋風な生活を営んでいる坂井と宗助の間には、その崖の高さが端的に象徴する「文明」の落差が存在する。

下級官吏で生活に困窮している宗助とは違い、坂井は「裕福で鷹揚」(九)な楽道家として描かれている。テキストの中で坂井は宗助の父が残した抱一の屏風を買取り、日本の伝統芸術に大変関心を持つ人物のように見える。このほか、夜になると、崖の上からピアノの音が流れ、坂井の家で集まる子供たちは「西洋の叔母さんごっこ」(十四)をしている。宗助も「崖の上に西洋人が住んでゐる」(九)のように感じている。しかし、このような知的な外見の下、坂井自身の学識の乏しさに関する描写も数多く存在する。宗助が坂井の購入した屏風を確認しに坂井家を訪れる際、坂井は見栄を張っている品評するが、芸術に無関心の宗助にさえ「普通一般に知れ渡つた事もだいぶ交つてみた」(九)と聞こえる。また、論語好きな芸者の話が持ち出される時の、「私も子路はあまりよく知らないから困つた」(十六)という彼の発言を見ると、坂井には知識人としての一般的な教養も備わっていないことが容易に分かる。坂井は漱石が批判してきた上辺の見栄を追求して、「自分の酒を人に飲んで貰つて、後から其品評を聴いて、それを理が非でもさうだとして仕舞う」(「私の個人主義」)側面を持っていることは否めないのである。

また、宗助と坂井との住居の空間的配置も、二人のアレゴリー的な性格を理解する手がかりとなる。坂井の住む家は宗助の家屋の崖の上にある。その「廂に逼り」、「縁鼻から聳えてゐる」(一)崖は宗助の家を半ば覆う「殻」のような形をなしている。換言すれば、表の様態と本当の姿を分かつ境界線である。坂井は宗助の発展の1つの可能性として提示されており、宗助とは一体両面の存在と言えよう。彼と宗助は近代日本を表す2つの側面である。坂井は、「現代日本の開化」

の中で批判された西洋が百年をかけて積み重ねてきた成果をその半分の時間で成し遂げようとし、日露戦争後に一等国と自認した日本の表の繁栄を象徴している。宗助は、自己本位がなく、性急に西洋的な近代を移植しようとした副作用によって神経衰弱が蔓延る日本の実態の隠喩である。

宗助が坂井の家に侵入した泥棒が崖の下に捨てた「文庫」を届ける時まで、二人の間には「隣人としての親みは、丸で存在してゐなかつたのである」。(九)宗助夫婦が得られる坂井に関する情報は、坂井は髭がないことや、外の子供をブランコに乗せないケチな人であるといった噂話だけである。宗助が、後に悉く偽だと証明されるこれらの噂話で勝手に坂井をイメージすることは、坂井が「冒険者」の一言で外地で生活する人を想像することと同じような性質を持っている。もっとも、坂井にとって宗助は、単に彼の抱える多くの賃借人の一人で、まさに意識の周縁にいる存在である。

前述した意識の構造の視点から見ると、坂井の住む崖の上は識閥上の意識空間であり、宗助の住む日当たりの悪い崖の下は抑圧される「識末もしくは識閥下」の部分に相当する。アレゴリー的に造形された意識空間を分ける「いつ壊れるか分らない」(一)崖の危うさが示すように、宗助が文庫を返すために「識閥上」つまり崖の上に上がる前にも、2つの空間を交通する「情緒」は絶え間なく生じている。例えば、時々崖の上から流れる坂井家のお嬢さんが弾いていると思われるピアノの音が、子供がないことに絶えず罪の意識を抱く夫婦の神経を刺激している。御米は、崖の上の賑やかさによって、常に子供の不在を意識させられている。

子供がいない苦しみに耐えられず泣き出した御米を慰めるために、「子供なんぞ、無くてもいいじゃないか。上の坂井さんみたようにたくさん生れて御覧、傍から見ても気の毒だよ。まるで幼稚園」(十三)だと宗助は慰みの言葉を並べるが、心の中ではずっと御米の反応をヒステリーの発作だと思っている。宗助夫婦、とりわけ御米は、子供を授からないことが安井

を裏切ったことへの報いであると暗黙のうちに捉えている。それを宗助夫婦に意識させつづける坂井は、二人の「今」を抑圧する存在として「崖の下という無意識領域」を常に攪乱している。

崖の上から流れてくるピアノの音などの「情緒的 f」が宗助に過去を意識させる機能を持つとすれば、下から上に移動するものは日本—外地という植民地的構造を端的に示している。宗助は下女の清に毎月の家賃を託し、崖の上に届けさせている。土地に直結する金銭のこのような収奪行為は近代植民地主義の原理を想起させる。

そして、下から上に上がるもう一つの物は、宗助の父が遺した抱一の屏風である。坂井家に入入りする道具屋はそれを 35 円で購入し、80 円で坂井に転売した。この場合、媒介者としての道具屋は、宗助の得るはずの利益の大半を奪ったのである。同じ崖の下という空間に住み、宗助から物を搾取し、それを崖の上に高額に転売する道具屋は 19 世紀以来、満洲ないし中国全土で諸列強の代理人を務めた買弁という存在を連想させる。抱一の屏風は宗助の父が彼に遺した数少ない財産である。叔母からこの屏風を見せられると、父が正月に必ずこの屏風を蔵から出していたことや、宗助が虎の双幅に墨を塗った悪戯など、家族と過ごした記憶がありありと浮かんでくる。すなわち、この屏風は夫婦の現在性の原理を相対化し、宗助の追憶を喚起する存在である。なお、光琳に私淑し、俳諧趣味を取り入れた江戸琳派の祖と尊ばれた酒井抱一が描いた屏風は、宗助が捨象した東洋伝統の審美的情緒、意味空間を体現するものである。

したがって、御米がこの夫婦の現在の時間を脅かす存在を家の中から除去しようとするのも当然である。宗助が初め逡巡し、屏風を売ろうという御米の提案に可否を示さないのは、父との思い出の他に、決別した過去の倫理への識閥下の情動が彼の決断を阻んでいるのであろう。しかし、古道具屋が 35 円の値を出すと、後にこの屏風が 80 円で坂井に転売されることを知らずに夫婦は快諾する。屏風を巡るこのエピソードでは、東洋的伝統の意味の地平が近代的功利主義に回収

され、本来のあり方とは異質なものに変化する過程が描かれている。

坂井が抱一の屏風を買い取るのは、彼の知識の乏しさから見ると、見栄を張るだけのためであろう。宗助の過去を搾取し、それを金銭に換算する行為は、宗助の「過去」への情動を喚起しながらも彼の過去を篡奪し、彼を「現在」に縛りつけることを意味する。住民を搾取する植民者にも例え得る坂井は、いわば被植民者である宗助から、「過去」を徴収する存在として前景化されている。そして、近代の功利主義的原理に侵食された日常の中で、この搾取が見事に隠蔽されるのである。ここで、もし自身が順当に発展していけば、坂井になれるという宗助の予想はまさに植民地である外地のもつ宗主国に対する求心性のあらわれでもある。

以上から見てきたように、崖の上と下との空間的な構造は、前述した内地と満洲の構図と同じように、漱石が『文学論』に提示に提示した「焦点的意識」と「辺端的意識」の構図をアレゴリー的に反映している。崖の上と下という構造に焦点的印象または観念である F の変動が発生する最初の契機は、坂井の「祖母が昔し御殿へ勤めてゐた」(九) 時にももらった、過去の遺物としての文庫によって喚起される「情緒的 f」が、崖の上から落ちたことである。これをきっかけとして宗助が崖の上に赴き、坂井と親交を深めることで、焦点的意識の F の変動が引き起こされる。

2. 情念という「病」

『門』の中で近代日本の開化の 2 つの側面の寓意性を有する宗助と坂井は、それぞれに精神の避難所を持っている。宗助は週一回の日曜の休みを「六日半の非精神的行動」を回復する場として利用している。冒頭で多くの分量が費やされる宗助の休日の行動は、朝寝の他に、勧工場と商店の見物と、電車に乗ってあちこちを見て回ることなどである。宗助がいつも出勤に利用する電車の中で、日常に埋もれる平日には注目しない乗り合わせの乗客や電車中の広告などを見、まる

で「別の世界に来たやうな心持がした。」(二)と感じる。このように、日常性から離れ、物の新鮮さを求める様子は、安井に案内され、京都を歩き回った頃のかつての宗助を想起させる。

一方、坂井は家の中に、面倒なことから「避難」する書齋という「洞窟」(十六)を持っている。彼が書齋で宗助に対し、遊郭で見聞きした物事について話す場面がある。彼は習慣によって、「遊郭」という江戸の遺風が漂う空間にいまだに頻繁に足を運んでいる。以上から見れば、おそらく宗助と坂井は両方とも自分の日常生活、つまり現在の「非精神的」(一)な疲労から回復するために、「過去」という地平に消耗した自我の回復を求めている。

宗助と同じ日常性を共有する御米も、家の中で自己を回復する場を持っている。それは彼女が宗助との思い出の品を収納する「六畳」という空間である。前田愛は、「負の痕跡」がまとわりつくこの六畳の空間が、夫婦の現在を支える無意識の深層を担う負の過去と繋がっており、その暗い過去を取り込むことによって、夫婦の現在は常に更新されていると指摘している。それによって、夫婦の日常の現在性の至るところに亀裂が走る。そのため、貧困が理由で一時的にこの六畳の間に住むことになる小六は、夫婦の無意識の領域の侵犯者となる。この空間と同化した御米の身体が小六の侵犯に反応し、激しい病気に襲われる⁸。しかし、すでに論じたように、象徴の文脈から見れば、前近代という過去の原理を象徴する安井が追放されることで、宗助夫婦の現在と過去との間には厳然たる断絶が存在している。夫婦は濃密な近代的記号に囲まれているが、彼らの現在を支える過去はもはや存在しないのである。それは外発的な開化がもたらす、内実の必然的な空虚である。夫婦の現在は、すでに喪失された過去の虚像が織りなす深層の上に漂う、薄っぺらで不安定なものでしかないのである。

テキストの中で御米が自分の精神の避難所を小六に提供するの、自分たちの罪によって未来を閉ざされた小六への罪滅ぼしの心理の発露と言える。しかし、本論末尾でより詳しく説明するように、その行為は、

過去の否定的な記憶を帯びた小六を部屋に招き入れることで、明確化されない無意識の豊饒な地平を回復しようとする欲望の偽装であると解釈される。

御米を襲う急病はむしろ、過去の寓意性を有する小六が御米の無意識の深層に下降したことによって、御米が自我のアイデンティティを保証する過去の不在を無意識の内に認識せざるを得なくなることに對する、身体の反動であろう。それによって激しく逆巻く情緒が識閥上に上がり、御米の身体にその反応を刻み込むのである。

以上の分析から、『門』における病に託された一つの機能とは、近代日本の寓意性を持つ人物たちが、無意識の領域で過去の不在に気づこうとする時に、識閥下から上昇する情緒に対する身体の反応であることが分かる。御米を襲った急激な病気とは対照的に、歯痛という慢性病はずっと宗助の神経をすり減らしている。ゆっくり発展する宗助の歯痛は、移植された西洋的近代に随伴する慢性病である「植民地主義」の暗喩が潜まれている。宗助と歯医者とは、歯痛に関して次のように語る。

「何うも斯う弛みますと、到底元のように緊る訳には参りますまいと思ひますが。何しろ中がエソになつて居りますから」と云つた。

宗助は此宣告を淋しい秋の光の様に感じた。もうそんな年なんでせうかと聞いて見たくなつたが、少し極りが悪いので、ただ、

「ぢや癒らないんですか」と念を押した。

肥つた男は笑ひながら斯う云つた。——

「まあ癒らないと申し上げるより外に仕方が御座んせん。已を得なければ、思ひ切つて抜い仕舞ふんですが、今の所では、まだ夫程でも御座いますまいから、ただ御痛み丈を留めて置きます。何しろエソ——エソと申しても御分りにならないかも知れませんが、中が丸で腐つて居ります」(五)

外見だけではわからないものの、歯の中はすでに根

治しようがないほどに腐っている。このような外見と内実の乖離は、宗助個人の主体性の空虚を意味するだけでなく、近代日本の「外発的開化」そのものをも暗喩の形で表現している⁹。しかし、すでに述べたように、主人公の病気は、識閥下から上昇してくる「過去」への情念に深く関わっている。

『門』の冒頭で、縁側で寝転んでいる宗助が障子の方へ寝返りし、その中で「細君が裁縫をしてゐる」(一)のを見る。面白いことに、「裁縫」には「しごと」というルビが振られている。官吏という公的な身分を持つ宗助とは違い、「家」という私的な領域に閉じ込められた御米にとって、裁縫などの家事はまさに仕事と言えよう。「裁縫」という記号表現に「仕事」という記号内容を与えることで、当時の社会における一般的な男女の役割が精妙に表現されているのである。

「漱石にとって当て字が表現手段の一つ」¹⁰であり、こうした音と文字の差異を精妙に利用し、その間隔にある豊饒な意味的な地平を発掘するのは漱石の小説の一つの特徴である。ならば、「壞疽」という漢字の記号表現を持ちながらも、「エソ」という音に病気自体より広い意味が託されていると考えられる¹¹。そしておそらく、近代日本の「外発的な開化」の暗喩以外に、宗助の病気に隠されたもう一つの仕掛けとは、日本の「内国植民地」である北海道の暗喩である。

『日本書記』には、北海道はすでに「渡島」として登場している。近代までは、アイヌ民族の呼称である蝦夷にちなみ、蝦夷地と呼ばれてきた¹²。明治維新以降、本格的な開拓と民衆の北海道への移住を展開しようとした明治政府は、ロシアを始めとする諸外国への顧慮によって、異民族の地という意味が含まれた「蝦夷地」という呼称を廃止し、改称を行った。そして、明治2年「蝦夷地自今北海道ト被稱 十一ヶ国ニ分割 國名郡名等別紙之通被 仰出候事」¹³という太政官布告が発令された。その改称は「内国植民地」としての北海道の発足とも言えよう。蝦夷はアイヌ民族に対する蔑称ではあるが、アイヌ民族の所有地を意味する点では、その内実と表現が一致する。周知のように、「五畿七道」の行政単位の廃止は明治4年(1871)の「廢

藩置県」を待たねばならない。明治2年での「道」という行政単位への改称は、まさにアイヌ民族と土地の関係に対する隠蔽工作である。「エソ」という病名には、明治初年に行われた上述の隠蔽工作の暗喩が託されている。

また、現代仮名遣いでごく自然に使われている濁点は、それ以前の表記では必ずしも用いられなかった。「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と記されているように、「大日本帝国憲法」のような法令文書に濁点は付けられていない。太政官布告のような法令文書に濁点をつけることが規定されるのは、昭和21年(1946)の「憲法改正草案」を待たなければならない¹⁴。そこで、エソという音は、当時の読者の記憶の深層に、法令文書といった公文書の中の「蝦夷」に振られた「エソ」のルビに連想させる機能を持っている。列強との交流のために、蝦夷地という呼称を廃止することは、西洋的近代文明の原理による土地の歴史に対する篡奪と言えよう。「道」という行政単位の機能的な一般性は、アイヌ人とこの土地にまつわる歴史の固有性が隠蔽された明治維新以降の近代化の悪弊を見えづらくする。外見は普通ではあるが、中はすでに腐り切り、「指で揺かすと、根がぐらぐらする」(五) 齒は宗助の家と廂に迫る「いつ壊れるか分らない」(一) 崖の空間と似たような構造を持っている。屋根と崖の間の空間は、まさに宗助の腐ってなくなった齒の中身に通じる。「エソ」と「蝦夷」との関係が示しているように、『門』における植民地的な空間とは、単に中心に相対する周縁の場であるだけでなく、西洋近代のヘゲモニーによって過去を篡奪された空間である。そして、この空間を流れる近代の空虚な時間は、自らの起源である篡奪を隠蔽している。テキストにおける植民地主義への意識は、安井が赴いた外地と宗助がいる内地との対立にとどまることなく、人物の住む空間ないしその身体に託され、重層的に表象されている。

上述のような「文明」を尺度とする中心対周縁の構図はほかにもある。正月の間に、宗助の家の周りの小道は雪によって泥濘になっている。そこで、靴を汚した宗助が御米に、家の周りの泥濘とは違い下町の方は

どこでも乾いており、自分たちの住まいがまるで一世紀遅れているかのようだと告げる。このように、個人の身体的感覚から重層的に拡大し、最後に日本と帝国の周縁である「植民地」まで拡大する空間的構造は、漱石の文学理論の体現だと考えられる。漱石は『文学論』第一編第一章の「文学的内容の形式」で、焦点的印象または観念であるFを次のように分類した

- (一) 一刻の意識に於けるF、
- (二) 個人的一世の一時期に於けるF、
- (三) 社会進化の一時期に於けるF、

宗助を襲う歯痛という「一刻の意識に於けるF」から、山の手の下で生活する「個人的一世の一時期に於けるF」や、日本と植民地の近代化という「社会進化の一時期に於けるF」に至るまで、重層的に拡大していく焦点的意識がテキストの表層を構成しているのだと言えよう。しかし、それぞれの焦点は決して孤立したものではない。以上に述べたように、深層である「識末もしくは識闕下」の空間が設置されることによって、テキストは一つの全体として構成される。しかしそこでは、崖の上から流れてくるピアノの音や外地からもたらされる安井の消息が、意識的な空間と無意識的な空間を横断的に交通している。それらの「情緒的なf」は、登場人物の意識と行動を攪乱し、作品のプロットを不可視の力によって推し進める機能を果たしている。

3. 「門」を潜ること

宗助が歯医者を訪れるエピソードは、単にテキストにおける重層的な空間構造の反映であるだけではない。「ある歯医者門を潜つたのである」(五)という描写にテキストの無意識の深層に迫るヒントが隠されている。作品のタイトルを連想させる「門を潜る」という表現がテキストに繰り返しあらわれている。まずは、宗助が歯痛を治療するために「歯医者門を潜つた」ことである。次は御米が失われた子供の位牌によ

り引き起こされた不安を鎮めるため、「ある易者の門を潜つた」(十三)一節である。そして、二人の日常生活における信仰の比重を説明する、「二人はとかくして会堂の腰掛にも倚らず、寺院の門も潜らずに過ぎた」(十七)という一文である。最後は、宗助が参禅する際に寺院の山門を潜つたことである。

御米は三度目に子供を亡くした後、着替える際不意に、箆笥の底にしまった新しい子供の位牌に触れることで引き起こされる不安を鎮めるため、易者の門に入る。そこで易者から、「人に済まない事ことをした」(十三)ため、子供が出来ないという宣告を受ける。この宣告は、彼女が無意識の中に抑圧している安井に対する「罪」と響き合い、夫婦の日常に亀裂を来す機能を果たしている。易者に助けを求めるという「迷信」的行為について、以下のような記述がある

彼女は多数の文明人に共通な迷信を子供の時から持つてゐた。けれども平生は其迷信が又多数の文明人と同じ様に、遊戯的に外に現はれる丈で済んでゐた。それが実生活の厳かな部分を冒す様になつたのは、全く珍らしいと云はなければならなかつた。(十三)

彼女を易者の元へと向かわせたのは、過去から持っていた迷信である。そこで「迷信」に対比されるのは「文明」という地平である。「文明人」としての意識によって抑圧されているため、彼女の「迷信」の発露は極めて困難だと言えよう。そこで、子供の喪失によって喚起された「迷信」が、まるで意識の周縁に身を潜む幽霊のように彼女を易者に突き出すことになる。

この場合、迷信は文明の近代と相対する過去の象徴とされている。チャールズ・テイラーは「脱呪術化」を近代化の一つの重要な徴候と見做している¹⁵。文明と相容れない迷信は、現象を非科学的で多種多様な土着的な原理で説明するものである。漱石は『文学評論』で、「歴史又は批評」について趣味による鑑賞と科学による批評という二種類の批評法を挙げている。「文明」と相容れない「迷信」はまさに、『文学評論』の

中のせめぎ合う以上二つの地平を連想させる。ここで、「易者の門を潜った」行為は無意識の領域に抑圧された「過去」の歴史と伝統の空間へ下降することを意味する。

易者の助けを求めるという行為は、御米の識閥下で蠢く「安井」という過去に対する情動の働きの結果である。しかし、過去を象徴する安井を満洲に追いやったため、彼女と宗助にとってもはや過去自体が存在していない。ここでの「迷信」はむしろテキストの深層から湧き出る失われた過去を求める情緒的なfである。易者の宣告は、夫婦の現在が始まる契機、つまり安井に対する「不義」を否定なしに彼女の意識に現前させる。作品の中で、「(前略) 寺院の門も潜らずに過ぎた」(十七)という一節の前で、宗助と御米との間に「信仰」をめぐる、「答えのない」次のような会話が交わされる。

「御米、御前信仰の心が起つた事があるかい」と或時宗助が御米に聞いた。御米は、ただ、「あるわ」と答へた丈で、すぐ「貴方は」と聞き返した。宗助は薄笑ひをしたがり、何とも答へなかつた。(十七)

宗助と御米が共にその内容を避けて答えられない信仰自体は、近代文明を代表する科学と相対する、土着的で非科学的なものである。この意味で、小説全体を貫流する信仰的なものはむしろ、「安井」に「済まない事をした」(十三)のために子供が次々と亡くなったという因果応報の観念である。その意識自体は無意識の領域から上昇してくる「過去」に対する情念の働きであり、その考えを認めることは彼らが忘却しようとする「安井」を呼び戻すことに等しい。そこで宗助は、御米から易者との会話を聞いた時に「馬鹿気である」(十三)と斥け、無理矢理にそれを御米の神経症のせいにするのである。「易者の門を潜る」(十三)ことで御米が無意識の空間に下降するのと同じように、宗助が入る歯医者診療室も彼の意識を反映するのである。彼が待合室で手に取る『成功』という雑誌には、

次のような成功の秘訣が記されてある

成効の秘訣といふ様なものが箇条書にしてあつたうちに、何でも猛進しなくつては不可ないと云ふ一ヶ条と、ただ猛進しても不可ない、立派な根底の上に立つて、猛進しなくつてはならないと云ふ一ヶ条を読んで、それなり雑誌を伏せた。(五)

宗助はそれを見て成功と自分との距離を改めて実感する。御米を奪ったことによって自分の手で輝かしい未来を葬ったのは、まさに「猛進」と言うべきである。それは近代の寓意を担う宗助が、過去や歴史を象徴する安井という「立派な根底」(五)を葬ったことを代償とする猛進である。そこで、彼の目は雑誌に掲載された漢詩に惹かれる。

風碧落を吹いて浮雲尽き、月東山に上つて玉一団(中略)斯んな景色と同じ様な心持になれたら、人間も無嬉しかろうと、ひょつと心が動いたのである。宗助は好奇心から此句の前に付いてある論文を読んで見た。然し夫は丸で無関係の様に思はれた。只此二句が雑誌を置いた後でも、しきりに彼の頭の中を徘徊した。彼の生活は実際此四五年來斯ういふ景色に出逢つた事がなかつたのである。(五)

宗助は歌や詩などに関心を持たない男であり、彼が惹かれるのは対句の旨さなどではなく、単にこの漢詩に書かれた景色自体である。しかし、その景色は宗助の生活の中でそれほど珍しいものではないはずである。廂に迫りかかる崖はちょうど宗助の家の東に位置している。たまに座敷の東側の座敷に座り、「庇と崖の間に細く映る空の色」(四)を眺める宗助にとっては、満月が東の山に上る情景はすでに日常の一部に溶け込んでいたはずである¹⁶。また、家の周囲の夜道を歩けば、風が月を遮る雲を一掃する情景も見ることができる。また、彼の生活でこのような景色と出会っていない四五年という時間は、彼が東京に戻った以来の時間に

も近い。

では、なぜ彼は日常の一部と化したはずの景色を珍しく感じるのか。柄谷行人が指摘するように、近代文学と心理学との共謀によって、伝統文芸の中で一つの意味体系に統括された人間の心理と風景が互いに対する疎外を余儀なくされた。そこで、人間の心理によって解釈される「風景」が成立したのである¹⁷。この意味で、漢詩というという伝統的な文芸に描かれる風景は、近代文学としての『門』で宗助が日常的に眺める景色とは根本的に異質なものである。実際に、宗助の心境をあらわす「こんな景色と同じような心持になれば」(五)という一文で、宗助は「景色」を見たいのではなく、「風景が持つ心持ち」、つまり風景自体が担う意味になりたいと願う。それはまさに、人と景色が同じ意味を共有する前近代の意味空間へ回帰する情念の発露であろう。その夜、宗助が唐突に『論語』を読みたいと感じるのは、漢学における文学の源流の一つである儒教の経典に遡行することで、失われた「過去」を回復しようとする無意識の衝動の働きであろう。しかし、御米に「論語に何かがあつて」(五)と問われても、ただ「いや何にもない」(五)としか答えられないのは、彼が忘却した自らの起源を未だに抑圧している証である。

宗助が読んだ『成効』という雑誌は、明治35年(1902)成功雑誌社から創刊された月刊誌『成功』にちなんだものである。彼が手に取った「成功の秘訣」と後の「漢詩文」が記載されたのは、明治43年(1910)の元旦号である¹⁸。明治42年の秋に身を置くはずの宗助が明治43年の元旦号を読むことに、明らかな時間のずれが存在する。柴田勝二は、この時間のギャップは「作品に〈現在〉と〈未来〉の時間が混在していることを端的に示して」おり、宗助の内に常に「成功」への志向が働いていることを示している、と指摘した¹⁹。最後に、この成功の未来が作品の中でどのように表象されているのかを知るため、宗助の弟の小六に焦点を当てたい。

終章 未来への志向

安井の帰還の消息を坂井から受け取る前に、宗助の日常空間の安定性はすでに不穏さの端緒を見せ始める。それは、彼が弟の小六を自らの家に迎えることである。叔父の死後、息子の安之助に小六の学業に対する支援を断られたため、宗助は、進路に迷い途方に暮れた小六を家に迎え入れる。小六は昔の宗助とよく似ている。かつての宗助と同じように、無限な可能性に満ちた未来を憧憬している。宗助は、書生時代の自分によく似た小六を見るたびに、「昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動してゐる様」(「四」)に感じている。以上の箇所から見れば、小六はかつての宗助の一つの分身のような存在として造形されていることがわかる。西洋近代の原理によっていわば去勢される以前の宗助のように、小六の持つ未来への可能性は未だに封じられていない。この意味で小六は、近代日本が自己本位のありかたを有したまま開化へと向かう可能性を、象徴的に託された人物であると言えるだろう。

しかし、未来の寓意性を有する一方、小六は過去の象徴性をも担っている。安井と同じように、小六も夫婦の不義の被害者である。もし宗助が御米と結婚する事なく順当な発展を迎えていたら、財産を叔父に奪われることもなかったであろう。小六も悩まずに大学に入学することができる。小六は、宗助が叔母一家に自分の学資についての相談を怠ったことについて、「元来今度の事も元を糺せば兄が責任者である」(四)という憤懣を御米に吐露する。もっとも御米には、それが自分に言っていると聞こえるのであろう。「小六さん、まだ私の事を悪んでゐらしやるでせう」(六)という宗助に対する質問から考えれば、小六の存在は安井と同じように夫婦の罪を喚起する機能を持っている。それに加え小六は、大学に入学する見込みがないなら、「僕は学校を已めて、一層今のうち、満洲か朝鮮へでも行かうかと思つてる」(三)という決意を持っている。小六は、宗助夫婦に自分の罪によって外地に追いやられた安井の存在と重ね合わされている。

一方、作家自身の経験がテキストの素材となり、作者自身の意識を反映する部分も多く見られる。漱石は23歳の夏、友人四人と房総半島に旅行したことがある。この旅行での体験を元に、漱石は漢詩文の旅行記『木屑録』を残した。小六が「房州の海水浴へ」行き、そこから「保田から向ふへ突切って、上総の海岸を九十九里伝ひに、銚子迄来た」(四)旅行は、明らかに漱石の房州旅行の経験に基づいたものである。このことから見れば、小六も安井と同じような過去の象徴性を託されていると思われる。なお、旅行から戻った小六は「見違へる様に蛮色」(四)を帯びている。「蛮」は文明に相反するという意味で、満洲という外地を形容する語でもある。未来を象徴する小六は、同時に過去、つまり「安井」を内面化することで造形されていると考えられる。

関谷由美子は、宗助の突然の参禅は妻と小六の接近に「全く不用意な夫」という文脈を完成し、それによって自分が「安井」になり、「自らの起源」である一種の同性愛的ユートピアへの回帰を果たす、と指摘した²⁰。安井が象徴する前近代は確かに宗助の起源のように見える。しかし、西洋近代のヘゲモニーによって葬られた過去の歴史的次元と「自己本位」のない近代の間には、むしろ越えられない断絶が存在する。宗助と御米の不義が象徴するこの断絶こそ、宗助の「今」の真の起源である。したがって、小六を家に招き入れる行為は、過去への回帰というより、過去を内面化することで、真の自己本位が有する開化が結実する、未来への希求だと理解すべきである。換言すれば、前近代と近代との断絶という歴史的矛盾を、テキストの象徴の次元で解決する行為でもある。しかし、未来の結実はすなわち現在の時間の終焉を意味し、宗助も記号的な死を迎えざるを得ないのである。宗助が小六を家に招く行為は、錯綜する過去である「安井」に対する追憶と未来である小六への希求という、識閥下における二つの情動の働きであろう。しかし、その先にあるのは宗助自身の死である。いわば、死に対する欲動は常に宗助の無意識に蠢動している。

識閥下にある死に対する情念を呼び覚まし、宗助に

実存的な不安をもたらすのは、言うまでもなく「安井」という過去の地平である。柄谷行人が指摘するように、三人の「三角関係によって喚起」されながらも、その三角関係が匹敵し得ない「宗助の内部の苦悩」²¹の本質は、宗助の識閥下で蠢動し、日常生活の中で絶え間なく前景化されつつある死へ情念であろう。もっとも、小六ないし妻の存在自体は宗助に「安井」を意識させる機能を有する。それらの「平凡な出来事」によってもたらされる不安は、宗助には抵抗し得ない「運命の力」(「十四」)と感じられるのであろう。すでに述べたように、近代国家という巨大な機械に組み込まれた宗助の主体性は、移入された西洋近代の原理によって支えられている。しかし、日常の中で辛うじて保たれた均衡は、坂井から受け取った、安井の帰還を伝える消息によって余儀なく崩れ去る。そして、識閥下に渦巻く情念を鎮めるため、宗助は参禅という非日常的な行為に走ることになる。安井が大陸から帰還するという情報を受け、宗助はやがて自分の過去の罪との対決を迫られる。テキストの象徴的な文脈から見れば、近代日本の寓意性を帯びた登場人物は、急激な西洋化によってもたらされる近代と前近代の断絶という歴史的な矛盾をやがて直視しなければならなくなるのである。

彼が鎌倉への参禅を決行するのは、「門」という意識的空間と無意識的空間の境を潜り抜け、自身の無意識の領域の深層に下降し、過去の不在と対決するためであろう。その上、小六を自分の家に招き入れることと同じように、文明・科学の代表する近代の原理に相対する禅に代表される宗教・文化的な地平を取り込み、倫理的な空虚を充填しようとする行為は、作品の一貫する文脈の最終的な到達点であると言えよう。

宗助が求めるのは、禅の悟りによる識閥下に渦巻く情念の沈静化である。それをもたらすことができるのは、アイデンティティーの揺らぎを安定させる真の「自己本位」の結実である。それは同時に、急激な西洋化によってもたらされた過去の不在という、歴史的矛盾の象徴レベルでの解決でもある。作中では、その「未来」に至る方法は参禅の際に老師に持ち出された禅の

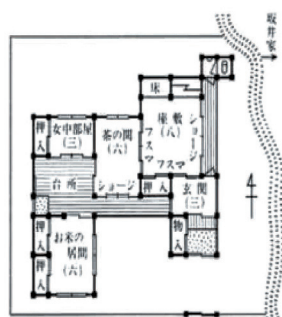
公案「父母未生以前の本来の面目」(一八)によって暗示されている。李潤生はこの公案を、生死の二元的構造を超越し、主体と客体が統合されることを意味するものと述べた²²。庄焯はこれが、漱石の文学における近代的な文明体系に相對する前近代的で土着な思考様式を表すものである、と指摘した²³。そして、加藤二郎はこれを、作品における主体と客体の二元論の解消と捉えた²⁴。

いずれの指摘も、対立する二つの矛盾を解消する構図をここに見出している。東洋的伝統の意味空間を「現在」に取り込むことで、西洋的近代と東洋の過去との

矛盾が揚棄され、自己本位の有する未来での開化へ到達することこそ、この禪の公案に託された作者の時代意識であろう。しかし、これから日常に戻り、「週六日働き一日休む」という近代の時間を生きていく宗助は、それを達成し得ないのである。悟りに至れずに、「門外に佇立むべき運命をもつて生れて来た」(二十一)宗助の宿命論的な認識の源である。むしろ、この歴史的矛盾の象徴レベルでの解決は、過去と未来の2つの寓意性を一身に帯びた小六に託されているのであろう。

注

- 1 本論文における作品の引用は2016年から発売される岩波書店の最新刊の『漱石全集』より
- 2 柴田勝二(2006)、「陰画としての〈西洋〉—『門』と帝国主義」、翰林書房、138頁。
- 3 佐伯順子(1998)、『「色」と「愛」の比較文化史』、岩波書店。
- 4 前掲書227頁。
- 5 チャールズ・テイラー著、上野成利訳(2011)、『近代—想像された系譜』、岩波書店、69-97頁。
- 6 野網摩利子(2012)、「古い声からの呼びかけ—『門』に集まる古典』、『夏目漱石の時間の創出』、東京大学出版会、151-173頁。
- 7 漱石は『文学論』においては、ウィリアム・ジェームズなどの心理学的学説から啓発を得、意識の焦点の変動を1つ流れる波形として捉えた。「焦点的な意識」から「辺端的意識」への変動を(F+f)という図式をもって説明した。Fが焦点的観念または印象であり、fがそれに付着する情緒的なものとされている。そして、『文学論』の第五編第二章「意識推移の原則」では、意識の焦点的変動すなわちFからF'への変動には「識末もしくは識闕下」である「の競争を経」なければならない。
- 8 前田愛(1992)、「山の手奥の奥」『都市空間のなかの文学』、筑摩書房。なお、前田の論では、部屋の中での「古い創だらけの筆筒」と雨季になると最初に雨漏りすることなどが「負」の過去の表徴とされている。
- 9 柴田勝二(2006)、「陰画としての〈西洋〉—『門』と帝国主義」、翰林書房、133-165頁。
- 10 多和田葉子(2019)「漱石がどんな石?」、安倍・オースグッド・玲子等編、『漱石の居場所—日本文学と世界文学の交差』、岩波書店14頁。
- 11 昭和51年(1976)11月15日に漱石文学館により発行された『門』の初版の復刻本にて確認。
- 12 田端宏等編(2000)『北海道の歴史』山川出版社、2頁。
- 13 内閣官報局(1912)『法令全書』「明治2年」、298頁。
- 14 平井昌夫(1998)「国語国字問題の画期的な昭和二十一年」『国語国字問題の歴史』三元社、379-440頁。
- 15 チャールズ・テイラー著、上野成利訳(2011)、『近代—想像された系譜』、岩波書店、69-97頁。



- 16 宗助の家と崖相対的位置—前掲・前田愛『都市空間のなかの文学』より
- 17 柄谷行人 (2008)、「風景の発見」『定本 日本近代文学の起源』岩波書店、7-41 頁。
- 18 『漱石全集』第五巻 『門』、注釈より、656-657 頁。
- 19 柴田勝二 (2006)、「陰画としての〈西洋〉—『門』と帝国主義」、翰林書房、59 頁。
- 20 関有美子 (2004)「循環するエージェンシー：『門』再考」『日本文学』53 (6)、日本文学協会、42-53 頁。
- 21 柄谷行人 (2017)、「意識と自然」『新版 漱石論集成』、岩波書店、2-68 頁。
- 22 李潤生 (2016)「六祖慧能・本来面目」『禅宗公案』、宗教文化出版社、48-52 頁。
- 23 庄焰 (2018)「在“二十世纪的文明”与“父母未生之前的世界”之间——以《趣味的遗传》为中心」『外国文学評論』2018 年第 1 号、5-37 頁。
- 24 加藤二郎 (1998)「生死の超越—漱石の「父母未生以前」」『文学』9(4)、岩波書店、148-160 頁。

参考文献

- 加藤二郎 (1998)「生死の超越—漱石の「父母未生以前」」『文学』9(4)、岩波書店、148-160 頁。
- 柄谷行人 (2008)、「風景の発見」『定本 日本近代文学の起源』岩波書店。
- 柄谷行人 (2017)、「意識と自然」『新版 漱石論集成』、岩波書店。
- 佐伯順子 (1998)、『「色」と「愛」の比較文化史』、岩波書店。
- 柴田勝二 (2006)、「陰画としての〈西洋〉—『門』と帝国主義」、翰林書房。
- 庄焰 (2018)「在“二十世纪的文明”与“父母未生之前的世界”之间——以《趣味的遗传》为中心」『外国文学評論』2018 年第 1 号、5-37 頁。
- 関有美子 (2004)「循環するエージェンシー：『門』再考」『日本文学』53(6)、日本文学協会、42-53 頁。
- 田端宏等編 (2000)『北海道の歴史』山川出版社。
- 多和田葉子 (2019)「漱石がどんな石?」、安倍・オースグッド・玲子等編、『漱石の居場所—日本文学と世界文学の交差』
- チャールズ・テイラー著、上野成利訳 (2011)、『近代—想像された系譜』、岩波書店。
- 内閣官報局 (1912)『法令全書』「明治 2 年」。
- 野網摩利子 (2012)、「古い声からの呼びかけ—『門』に集まる古典」『夏目漱石の時間の創出』、東京大学出版会。
- 平井昌夫 (1998)「国語国字問題の画期的な昭和二十一年」『国語国字問題の歴史』三元社。
- 前田愛 (1992)、「山の手奥」『都市空間のなかの文学』、筑摩書房。
- 李潤生 (2016)「六祖慧能・本来面目」『禅宗公案』、宗教文化出版社、48-52 頁。

キーワード：近代、植民地主義、無意識、情緒、禅